

長崎県型高設栽培におけるイチゴ「ゆめのか」の栽植密度（株間）と収量

○前田 衡・野田和也・松本尚之  
(長崎農林技開セ)

【目的】

長崎県では農家所得の向上を目的に、イチゴの主力品種である「さちのか」から、多収で輸送性に優れる「ゆめのか」への転換を図っている。「ゆめのか」は愛知県で育成された品種であり、西南暖地における栽培技術に関する知見が少ない。今後の更なる普及拡大には品種の特性を活かした安定生産技術の開発が必要であり、本県の環境条件に応じた栽培技術の構築が必要となる。そこで栽培の基礎となる指標の策定に向け、ここでは長崎県型高設栽培における「ゆめのか」に適した栽植密度（株間）を明らかにしたので報告する。

【材料および方法】

試験は2013年度と2014年度の2年間、長崎県農林技術開発センター内圃場の長崎県型高設栽培施設で実施した。

品種は「ゆめのか」を使用し、8月26日から15℃で暗黒低温処理した苗を株間15cm、20cm、25cm、30cmの2条千鳥植えて2013年9月12日、2014年9月10日にそれぞれ定植した。株間の違いによる頂花房と第1次腋花房の収穫開始日、花房間葉数、収量及び障害果発生への影響について調査した。

【結果および考察】

株間が狭いほど年内収量は多くなり、株間15cmで最も多かった。一方で1月以降の収量は株間15cm、20cm、25cmで同等となり、株間30cmではやや劣った（図1）。

平均1果重は株間が広いほど重くなる傾向となり、15cm株間で最も軽くなった（図1）。

25cmと30cmの株間では頂花房の収穫開始が早く、頂花房と第1次腋花房間葉数が少なくなり、第1次液花房の収穫は株間が広いほど収穫開始日が早くなった（表2）。

「ゆめのか」で比較的発生が多い先青果、先白果及び裂皮果の発生には株間の違いによる明確な影響が認められなかった（表3）。

以上のことから「ゆめのか」の高設栽培では株間が狭いと年内収量は向上するが、果実が小さくなり、第1次腋花房の収穫開始日が遅れる。株間

30cmでは年内収量と1月以降の収量とも劣るため、20cm～25cmの株間で安定した大玉生産が可能となると考えられる。株間が広がると定植株数が減るため、定植以降の作業省力化となる。そのため、農家経営の規模に応じた栽植密度を選択することも考えられる。

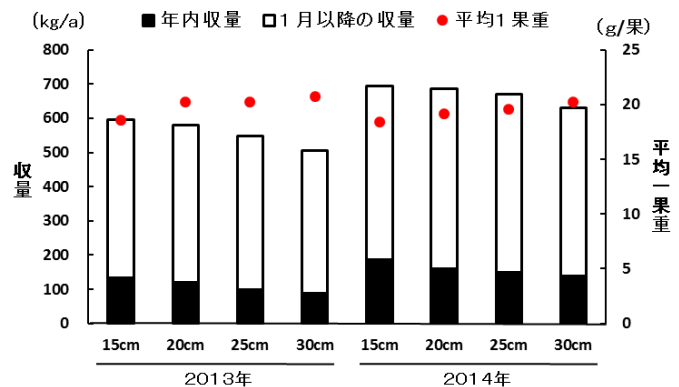


図1 「ゆめのか」の高設栽培における株間と収量及び平均1果重

表1 「ゆめのか」の高設栽培における株間と花房収穫開始日及び花房間葉数

	株間	栽植株数		頂花房 収穫開始日	頂～第1次 腋花房間葉数	第1次腋花房 収穫開始日
		(株/a)	比率(%)			
2013年	15cm	933	133	11/24±4	5.5 a	3/12±3
	20cm	700	100	11/23±4	5.7 a	3/9 ±2
	25cm	560	80	11/18±2	5.0 ab	3/3 ±2
	30cm	467	67	11/20±3	4.6 b	2/26±2
2014年	15cm	933	133	11/23±5	5.3 a	2/16±5
	20cm	700	100	11/23±6	4.9 ab	2/11±3
	25cm	560	80	11/15±3	4.5 bc	2/2 ±3
	30cm	467	67	11/14±1	4.3 c	1/30±2

※栽植株数の比率は株間20cmを100とした場合の比率

Tukey法により同年、同列の異なる英文字間に5%水準で有意差あり、±は95%信頼区間の幅

表2 「ゆめのか」の高設栽培における株間と障害果の発生率

	株間	先青+先白 果率(%)	不受精果率 (%)	裂皮果率 (%)
2013年	15cm	2.8	3.0	2.4
	20cm	4.9	3.5	0.8
	25cm	2.7	3.2	0.5
	30cm	3.7	3.1	0.5
2014年	15cm	4.8	4.9	0.2
	20cm	7.5	3.2	0.2
	25cm	6.3	3.2	1.4
	30cm	6.1	4.1	0.4